

活動分野	緑のおもしろ講座		
タイトル	ことわざや名句に見る森林と樹木		
実施日時	平成29年12月10日(日)10時~12時		
実施場所	千葉市都市緑化植物園 講習室		
受講者	10名	FIC会員他スタッフ	6名

### 活動の内容

「あとは野となれ山となれ」を筆頭に、森林と樹木の仕組みについて、今回担当の竹内が気に入っていることわざや名句をもとにスライドを使って説明。取り上げた内容は次のとおり。

①「あとは野となれ山となれ」、『野→山』の順番に着目して野(草原)から山(森林)に移り変わる植生遷移について解説。千葉県のような温暖多雨の気候の場合は最終的に常緑広葉樹林(照葉樹林)になり、これを極相林と呼ぶこと。極相林は気候によって落葉広葉樹林(夏緑林)などの別の形態になること。

また、私が勝手に植生遷移ともに生態学の2大理論と呼んでいる食物連鎖に触れ、近年の山里に住んでいた人々の都市部への移転により人が居なくなり、それに伴い人間界と自然界との緩衝地帯の役割を果たしていた里山が消失したために、イノシシ、シカなどの野生鳥獣が人間界に進出し被害が増えてきたことを説明。

②「あらたうと青葉若葉の日の光」、日光の二荒山神社を訪れた芭蕉が登るにつれ木々の葉が青葉から若葉に移り変わっていく様子を読んだ「奥の細道」の句から、植生の垂直分布について解説。

③「在地願為連理枝(地にあっては願わくば連理の枝とならん)」、白居易(白楽天)の長恨歌の一節から連理の枝を取り上げ、同種の植物間ではお互いの枝や幹などが癒合することがあること、しかし、この現象は異種間では起こらず、くっついていても単にお隣さんとして暮らしていること、しかし、競争状態になれば負けた方は衰退してしまうことを解説。

④「筍(竹の子)の親まさり」、タケの生長が早い理由と、節ごとの生長の観察記録を示し、その生長過程を解説。

⑤「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」、出典の空也上人絵詞伝「山川の末(さき)に流るる椽殻(とちがら)も身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」のトチの実の殻と身(実の種の部分)に着目して水の中に殻の着いた実全体を入れた場合、殻を取り外して実(種)と殻を分けた場合の浮き沈みを実験した時の様子を説明。

⑥「ナースツリー(ナースログ)」、日本では倒木更新と呼んでいる現象を欧米ではこのような素敵な言葉で呼んでいる。苗木が生育する倒木をナースツリーと呼ぶ欧米と日本の文化というか感性の違いが興味深い。



エノキの癒合木  
千葉市おゆみ野 大百池公園



癒合したマテバシイの切株  
富津市 鋸山